

華麗なる天棚群 — 板戸の天棚 —

宇都宮伝統文化連絡協議会 柏村 祐司



真新しい収蔵庫と蘇った天棚

鬼怒川の左岸にある板戸集落センターの敷地内に四棟の倉庫があり、その中に各々華麗な彫刻を施した天棚が収蔵されている。天棚は、天祭とか天念仏と呼ばれる行事に用いられた二階建ての施設である。天祭とか天念仏は、江戸時代後期から明治・大正期頃にかけて栃木・福島・茨城・千葉県等で流行した行事で、太陽や月をはじめとする神仏を祭り、村内安全・風雨順調・五穀豊穡等を祈願するものである。

ひとくちに天祭といってもやはり方が土地により異なる。栃木県内では集落内の高い山の頂で、先の神仏を祭り行事を行う所、高い櫓を築き、そのつべんに大日如来を祭り行事を行う所、板戸のように天棚を設置し、その二階部分に神仏を祭り行事を行う所等がある。いずれも、祭壇の回りを集落の成年男子が周りながら神仏に村内安全等を祈願するものである。

中でも櫓や天棚を築く地域では、三日三晩行事が繰り広げられ、その間、日に何度か、千度掛けと称して精進潔斎した数名の行人が櫓や天棚に登り、神仏に五穀豊穡等を祈願する。一方、櫓や天棚の回りを若者たちがお囃子の音に合わせて回る大掛かりなものとなる。ところで板戸のように彫刻を施した二階建ての天棚を用いるのは、宇都宮市を中心とした県央地域である。県央域は高い山とて少なく、平地が広がる。そうした地域で、天棚は山に代わる天に近い所となる。また、彫刻を施す風習は、時代的に周辺地域の彫刻屋台の建造時期と重なるところから、屋台の影響を受けたものと思われる。

板戸は江戸時代、板戸村としてあり、現在は反目、河岸田中、辻、中才、新屋敷、今泉の七つの集落からなる。板戸では昭和初期頃まで、集落ごとに天祭が七月下旬から九月初旬にかけて順次日を追って行われていたという。板戸集落センターの敷地内に天棚収蔵庫を持つ新屋敷、中才、辻、反目の四集落の天棚は、いずれも江戸時代末期頃から明治初期にかけて建造されたものである。現在、市内には五十基近くの天棚が存在するが、多くは二つの村（江戸時代の村、現在の大字）で二基の所蔵である。そうした中、板戸のように複数の集落で天棚を持つのは珍しい。天棚を建造した時期、板戸は河岸として鬼怒川の水運で栄えた。現在の金額でいえば二基数千万円もかかる天棚の建造費である。それを複数の集落が所蔵することは、板戸全体はもとよりそれぞれの集落も経済力があつたというわけである。今に残る天棚は、そうした水運で栄えた板戸の姿を今に伝える証である。



昔ながらの行人による祈願

昭和三十年代以降、板戸では天祭が行われなくなつてしまい、天棚も小屋に仕舞い込まれたままであった。それが、平成二十七年に地区内に一般廃棄物処理施設の建設を機に集落センター、および天棚収蔵庫が設置された。以来、八月盆の時期には、天祭が復活し、自慢の天棚も披露される。人々の喜びようは言うまでもない。